

## 美術の窓(138)

## アートプロジェクト全盛

大和文華館館長 浅野秀剛

近世絵画が専門の私が現代美術を意識するようになったのは、1988年に、千葉市立美術館開設の基本構想を策定していた時であったと思う。当時、千葉市教育委員会文化課に勤務していた私は、基本構想を策定する委員会の事務を担当していた。当時の私が最も意を砕いたのは、浮世絵を含む日本の近世絵画を新美術館の基本方針に入れることであった。そうならなければ、新美術館で浮世絵を収集すること、研究することができなくなってしまうからである。幸いにも、同じ千葉市内に建っている県立美術館が近代美術を活動の中心にしていることもあって、近世絵画を基本方針に入れることが決った。その時、問題になったのが、現代美術をどうするかということであった。私にとってそれは、どうでもいいことというより、むしろ無い方がよかった。現代美術も視野に入れるということは、人と予算がそれに割かれるということだからである。その時、美術館に勤める委員の一人が、「新しく地域に造る美術館が、現代の美術を活動の対象外にするということは、同時代人々と共に生きることを放棄することに等しい」という趣旨の発言をされた。その一言が、複数の委員の心を動かし、新美術館は、現代美術も基本方針に入れることが決ったのである。

千葉市美術館は、千葉ゆかり、近世、現代を三本の柱にすることになり、1995年11月に開館した。そんなある日、千葉市の隣の佐倉市に建ち、現代美術を活動の中心にしている川村記念美術館の学芸

員と話す機会があった。私は、現代美術を折にふれて見、そして考えているが、いいなあと思う作品が少ない、という意味のことを話した。そうしたら、その友人は、それは当たり前だ、自分だって、50にひとつ100にひとつしか感銘を受けるものがない。100年前、200年前の作品だって、時代の淘汰にあって残されているのだから、今作られた作品も時代の淘汰にあって一部しか残らないんだ、と言われた。その言葉は、私にとって「目から鱗」であった。作品を見て、無理に理解しようとしなくていい、無理に良さを感じようとしなくていい、と言われたのである。

2003年、千葉市美術館で、千葉アートネットワーク・プロジェクトが始まった。千葉大学教育学部芸術学研究室で実施してきたアートプロジェクトを拡張して、大学、美術館、NPO法人が協同し、学校その他の施設や地域の人々といっしょに行なうアートプロジェクトである。その事業は私が主担当だったわけではないが、私も一緒に始めたプロジェクトであったので、思いは浅くない。そしてそれは今も続いている。

2007年8月、新潟県上越市の大島区で開催されていたコンティニュー・アート・プロジェクトに千葉から出かけた。大島区というのは、大地の芸術祭と名付けられた越後妻有アートトリエンナーレの会場の西隣である。友人の作家に誘われたのがきっかけであるが、遠方で開催されているアートプロジェクトに参加したのはそれが初めてのように思う。その日は最終日の日曜で、暑い日であった。大島駅に降りたつまではよかったが、

バスもタクシーもないという事態は想定していなかった。覚悟を決めて、3〜4キロもある最も近い会場まで歩き始めたところ、30分くらいしたところで、車が止まり、声をかけられた。その車は、プロジェクトに参加している作家の人が運転している車だったのである。炎天下に歩いているのは地元の人ではないな、アートプロジェクトに来てくれた人かな、と思いを掛けたということであった。助かったし、ありがたかったが、見方を変えれば、それほど訪問者は少ないということになる。その後、年に何回かはアートプロジェクトに行くようになった。

私が奈良に来たのは、2008年4月であるが、その頃、県内で、アートプロジェクトはほとんど行なわれていなかったように思う。奈良県内のアートプロジェクトは2010年頃から本格化するということを知った。今に続く「奈良・町家の芸術祭 HANARART」が始まるのは2011年、その年は、「飛鳥アートプロジェクト」や「HAPPY SPOT NARA」「映像コテンパンダンテン」も開催されていて、奈良市の北隣でも「木津川アート」が開催された。今年9月から、「古都祝奈良(ことほぐなら)」と題された「東アジア文化都市2016奈良市」の中心行事である「八社寺アートプロジェクト」と「ならまちアートプロジェクト」が開催されており、10月には「奈良・町家の芸術祭 HANARART」、11月には「学園前アートフェスタ」も始まる。正に、アートプロジェクト全盛である。

アートプロジェクトが盛んになるのは、美術館に勤め、美術史を専門と

する者にとって喜ばしいことである。しかし、ここに来て、問題点も浮き彫りになってきたように思われる。その第一は作家の使い捨てである。一部の恵まれたアートプロジェクトは別にして、参加する作家にしかるべき報酬が支払われることはほとんどない。それどころか、多くの場合、制作費や交通費なども自前であることが多い。つまるところ、作品を発表したいという作家につけこんで安く開催しているのである。それが続くと作家は疲弊する。第二は批評の不在である。作家を誉めることはあっても辛口に批評することはほとんど行なわれない。それは、作家に報酬が払われないということと無関係ではない。

アートプロジェクトの主催者は、できるだけ作品の質を確保することが重要である。それはしかるべき報酬を払うよう努力することと表裏の関係にある。有料にすることも当然視野に入れなければならないし、有料無料を問わず、見るだけの人を含め、参加者・関係者は自由に勝手に批評するべきであろう。そうしなければ、アートプロジェクトは育たないし、いい作品も生まれにくい。私は、一部のアートプロジェクトが大量動員するようになったのは、地域を巻き込む新しいお祭という要素のためと考えている。だから、来年もやろうよ、という人を増やすためには、その根底となるアートがその魅力を欠いていては話にならないのである。

季刊 美のたより No.196

平成28年 10月 1日

発行 大和文華館